

平成三十一年一月一日発行 第二十九巻第一号 通巻第三三二号 (毎月一回一日発行)  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

# 槐 かい

岡井省二創刊

平成31年1月号



# 無量寿

高橋将夫

実 柘 榴 の 一 粒 と し て 輝 け り

秋 出 水 に て 王 道 も 修 理 中

ク ラ イ ン の 壺 を 出 ら れ ぬ ち ん ち ろ り ん

銀 漢 に さ ざ 波 の 立 つ 重 力 波

いつかうに腹をめされぬ菊人形

人数の中に入つてをる案山子

流れ星さてこれからをどう生きる

これ以上何を望むか猿酒

行く秋を追つて芭蕉の世界まで

無量寿のこの世のきはみ花槐

信玄と謙信対峙天の川

「槐」二十七周年全国大会

# 槐安集

水野恒彦

晩節や何も足らずに萩真白  
凍裂の木霊を返す山の神  
残像にかぶる残像かいつぶり  
あら玉の空の涯なき冬星座  
枯野来て我が座すも夢のうち

加藤みき

菊日和人を送りし書齋あり  
台風一過日を照り返す破れガラス  
神迎ふ杜の小鳥大鳥  
十六夜や草木に聞く妣のこゑ  
人道もフリー・ウエーもお元日

中島陽華

五芒星額に頂き海女の笛  
すず音のはたと止みたり十三夜  
天高しジャズとポテトと缶ビール  
秋麗のエッフェル塔の少女かな  
一鉢やひとよめぐりの百の菊

竹内悦子

稲妻や炸裂したる脳と臍  
伽藍石の四方は秋の気配かな  
敷物は牛の模様もんやう省二の忌  
水の秋動物園の匂ひかな  
東山大会くに社にてにかかる天蓋秋の虹



雨村敏子

大空に一閃の水尾雁渡る  
木犀の明るき水際留学生  
荔枝裂けそこにターヘル・アナトミア  
鬼どもと宴のさ中猿酒  
天狼<sup>シリウス</sup>星やどんと置かれし八頭

本多俊子

枯れながら王道を行くいぼむしり  
をとこへし日本海を背負ひけり  
月光に明日逢ふための服吊す  
秋意ふと朝の紅茶の琥珀いろ  
月よりも白き廢船流れけり

近藤喜子

夢いつか祈りに変はる黄落期  
燃えてゐる水や散り込みたる紅葉  
実南天みんな色づきたる安堵  
蓮の実の飛んで離るる小宇宙  
夕闇や藍火の色の神代めく

瀬川公馨

艶つぽき道行きとなる蔦紅葉  
秋の雲の遊び人風つら構え  
一滴詠え向きや草の露  
放縦な時は終りぬ地球の秋  
夕日なか白頭翁の帰り来し

柳川 晋

創造の神の傑作放屁虫  
気前よく枝分かれする稲つるび  
銀漢を閉ぢ込めてある万華鏡  
金色の海の入日や芒原  
文化とは湿度のことか京の月

熊川 暁子

ジーンズの穴の大きな秋が来た  
ものかげに鬼女のひそめる十三夜  
地球より頼るものなし水の秋  
月光にごつんと当たる怒りかな  
いわし雲大地が動く如くあり

寺田 すす江

短冊のひらひら萩の声を聞く  
美しき雲流れゆく紫苑かな  
いちにちを遥か麓に黄落期  
芙蓉の実寂しき人に鳴きにけり  
西方に未練つなぎて穴惑い

岩下 芳子

神在す森のそここ一夜茸  
ゆつくりと山を下り来る紅葉かな  
秋夕焼筋斗雲きんとらうんを染めにけり  
八百八橋くぐりくぐりて水の秋  
流るるも留まるもあり紅葉川

有松洋子

紅葉道修羅の道へと続くがに  
触角で明日を探せりきりぎりす  
地震の痕<sup>あと</sup>残る村にも今年米  
どこよりも秋風と会ふ大和道  
芒原風と光のあればこそ

岩月優美子

鶴渡る未来明るき空となり  
万物の研ぎ澄まされし十三夜  
瓢箪の世俗に遠くぶらりかな  
秋夕焼祈りし影はミレーとも  
ロマンいくつ乗せて進むや月の船

近藤紀子

秋バラや半世紀ぶりの出会ひなる  
秘めごとの一つや二つ酔芙蓉  
赤ワインを切子に注ぐ白い指  
柩にはいつぱいの白曼珠沙華  
思ふことのみなは言葉にならぬ秋

竹中一花

あれやこれこれやあれやと夜長かな  
オメダイを貰うてをりし蔦紅葉  
オメダイ=教会カトリックのメダル  
別々にゐて秋星を語りたる  
龍笛や荒神河原に秋を吹く  
波被る鬼の俎板雁渡し

前田美恵子

生身魂世俗の塵を洗ひをり  
哲学の道に出できし穴まどひ  
葉に盛らるる赤蒟蒻と残暑かな  
瘦身のマスクの女目で語る  
三十六峰包む秋の二重虹

中田禎子

一頭の鹿に付きゆく戒壇院  
茶粥食ぶ春日奥山秋のこゑ  
色鳥や枯山水の水の色  
鬼の子の壮志を抱きねむりける  
月煌々山房に棲む天邪鬼

吉田順子

芋の露宇宙ここより生まれり  
物言はぬ石に声聞く吾亦紅  
山影を水面に揺らし鴨来たる  
一天をゆさぶる子等の秋御輿  
柿紅葉うしろの闇を明るうす



# 槐市集

犬塚李里子

法師蟬身を震はせて透きとほる  
なる様になるしかなないさ秋出水  
いつになく青き山なみ敬老日  
眉ずみを引きて出かける西鶴忌  
くろぐろと虚空に降りし秋揚羽

井上静子

新校舎の夜学に通ふ舅かな  
山頂の雲と遊びし秋の風  
抱かるる稚の見上ぐる初紅葉  
菊日和子供乗せたる馬の尻  
へたのなき柿に語るや風の中

今井充子

新米の袋抱へし恵比須顔  
菊の香や来客の靴揃へたる  
秋海棠ほろと薄紅落ちにける  
誰の画ぞテーブルセンター萩と月  
ふんはりと蜻蛉目で追ふ昼日中

岩田洋子

ぷよぷよの稚の寝姿菊日和  
秘佛には会へずに帰る石露の花  
根刮ぎとなりし老松秋時雨  
スーホーの白馬月へとのぼりゆく  
月光や露天湯に身を晒しける



植木戴子

喜寿迎へ日の当りたる水引草  
永久齒少し出てきし運動会  
どんぐりや笑顔貫ひて帰りけり  
夕日まで歩いて行こう神の旅  
甘鯛のいち夜干なり軍星

江島照美

うそ寒や古里に居て異邦人  
秋冷や慈母と自我との板挟み  
秋惜しむ換毛のごと垢を捨て  
思ふほど思はれもせず美男葛  
身に入むや硯海の渦美しく

三木 享

すさまじや見込みに利休いくさ跡  
生くるまま乾く群鶏若冲忌  
秋天を焦がす祈りや火焰土器  
心病むシューマンの頬柳散る  
金秋と叫べククリムトの接吻

安野眞澄

青空や風の重たき稲実る  
瓶浜風のふたなかなかあかぬ秋湿り  
連山を包む秋虹黄昏るる  
地藏堂に朝日さし込み冬ぬくし  
山の辺のクレヨン五色紅葉かな

柳橋繁子

疎水ひく庭の石橋石露の花  
拾得の箒さきの前さきや萩の花  
きかん気の目元ぱつちり台風来  
傘傾ぎてすれちがふ路地花八つ手  
平成の御代のをはりの神の旅

山田佳子

難波津の上町大地後の月  
秋の色浮き州の水の深みかな  
雲ひとつなき青天や厄日あと  
ちちろ鳴く思ひ出せない数へ唄  
無口なる屋根屋の漢野分のあと

# 槐集

## 高橋将夫選

山粧ふ隠さるるべき真あり  
歌女かじよ鳴くや闇の深まるばかりなり  
大阪 江島 照美

かくれんぼ上手な虫は鳴かぬ虫  
いつまでも聞いて聞いてとすがる虫  
薄皮が剥ける快感熟熟柿  
松茸の出来から天下国家論  
守口 三木 享

下り築もつる恋の展開凶  
色変へぬ松に自由とならぬ枝  
それぞれの紅葉に赤の世界観  
人も樹も納得尽の冬隣  
大空に国境はなし鳥渡る  
大阪 藤田美耶子

秋蟬の絶えて静寂の広がりぬ  
露の世の夢をたたみし破蓮  
陽を集め風を集めて吊し柿  
フィナーレは喝采の中夕紅葉

豊の秋土のめぐみの黄金色  
大阪 平野 多聞

呼ぶ声に戻る山彦秋高し  
奥行の生れて来たる虫の闇  
往生の迷路を抜ける迎鐘  
成就如是一病息災吾亦紅  
秋の朝光と影が交はりぬ  
守口 中西 厚子

秋霖や過去と未来が混在す  
外灯の周りを秋が覆ひをる  
校庭を見詰める目にも秋の色  
分け隔て無く降り注ぐ秋日ざし  
わが美学あやふやとなる花野かな  
岡崎 犬塚李里子

淋しさのぐいと寄りくる蘆火かな  
茫茫と凪ぎて黙すや秋の潮  
空の色遠く拡がる松手入  
望の夜の翼ひろげし千羽鶴

# 銀河往來

## ◆槐集観照

薄皮が剥ける快感熟熟柿 江島 照美

やわらかな熟柿を詠むとき、皮を剥く時の快感に注目するのはこの作者ならではといえよう。誰もが経験しながら誰にも詠まれたことのない一句。

〈山粧ふ隠さるべき真あり〉の句、山の紅葉はその美しさだけを見てはならないようだ。

〈歌女鳴くや闇の深まるばかりなり〉の句、「歌女（かじよ）鳴く」は「蚯蚓鳴く」のこと。「昔、蛇は歌が上手だったが眼がなくて、蚯蚓の眼と自分の声を交換した」という説話による。

色変へぬ松に自由とならぬ枝 三木 亨

常緑の松もさすがに枝までは思い通りにならぬらしい。

〈松茸の出来から天下国家論〉の句、今年の松茸の出来の話からは天下国家論へ飛ぶとはなんとも愉快。

〈それぞれの紅葉に赤の世界観〉は紅葉に世界観を持ち出すあたり、掲句に通じるものがある。

〈下り築もつる恋の展開図〉の句、鮎が跳ね回る築篁を恋の展開図とみた。さすがと思う。どの句も物事を客観的にクールに見詰めているところがいかにもこの作者らしい。

露の世の夢をたたみし破蓮 藤田美耶子

破蓮の無惨な姿が美しく詠まれている。

〈陽を集め風を集めて吊し柿〉の句、「陽を集め」はありそうだが、「風を集め」にまで言及して広々とした句になった。

奥行の生まれ来て来たる虫の闇 平野 多聞  
たくさんの虫の声が闇に奥行を感じさせると捉えた感性に共振する。

〈呼ぶ声に戻る山彦秋高し〉の句、餅は返るものだが、呼ばれて帰ると捉えたところが味噌。「秋高し」で立句になった。

秋の朝光と影が交はりぬ 中西 厚子

光と影がその物体の所で交わっていると作者は捉えた。物体は光と影の交点であり、あるいは境界らしい。

〈秋霖や過去と未来が混在す〉の句は秋の長雨の本質に迫る。〈外灯の周りを秋が覆ひをる〉は外灯の周りの白々とした秋の明るさを巧みに捉えている。

淋しさのぐいと寄りくる蘆火かな 犬塚李里子

蘆火にはそんな抒情的な一面が確かにある。

雁わたる小さき頭に旅の夢 柴田 靖子

「雁」に「旅の夢」は豊かな叙情。「大きな夢」と「小さな頭」の対比は俳味豊か。一（以下略）